

# 汎用的なスキルの育成を視野に入れた ナショナルカリキュラム（中等教育）改革に関する研究

小柳和喜雄  
(奈良教育大学 教職開発講座 (教職大学院))

A Study on the Reform of National Curriculum (Secondary Education) with a View to the Development of  
Generic Skills

Wakio OYANAGI  
(Graduate School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

**要旨:**「汎用的な力の育成と関わる学習活動の設計及び評価方法」については、学校種を越えて課題となっており、様々な角度からこのような情報を収集し、実践的な方法や課題を検討することが求められてきている。この一連の動きの中で取り上げられている大きな関心事は、「生きる力」を基軸にこれまで進められてきた初等中等教育の方向性とキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどを基軸に世界で現在検討され、実際に国レベルのカリキュラム改革や実践が行われてきている方向性との関係である。そこで本報告では、これら重要な審議・検討と関わって、21世紀に求められる力の育成とその評価に関わって7か国調査を行い、カリキュラム改革、評価方法の改革に着手しているアイルランドの中等教育前期のカリキュラム改革の取組に目を向け、そのデザインの枠組みの特徴を明らかにしている。

**キーワード:** 汎用的な力 Generic skill

国レベルのカリキュラム改革 National Curriculum Reform

中等教育 Secondary Education

## 1. はじめに

アクティブラーニング、ラーニングコモンズをはじめとする学習方法や学習環境に関する取組の報告が高等教育の質保証と関わって聞かれるようになって久しい。そこでは、学生にどのような力が卒業後に求められるか、またその力を育成していくために入学時点からどのような学習支援や支援カリキュラムが必要となるかの検討が進められてきた。そこで目を向けられているのが、汎用的な力の育成であり、それと関わる学習活動の設計及び評価方法の検討であった。しかし実践は行ってもその改善に向けた評価方法やその質が検討課題であった。最近では、その評価に関わって、試行を経て、2013年から実際に運用が開始されているPROG (Progress Report on Generic Skills) が、国公立大学で採用される動きも見られ、教学の質保証とIR (Institutional Research) を繋げて考える取組も進められてきている<sup>1)</sup>。

一方で、義務教育段階でも平成24年12月より、日本の初等中等教育の内容・方向性に大きな影響があると考えられる「育成すべき資質・能力を踏まえた教育

目標・内容と評価の在り方に関する検討会」が開催され、先ごろ(平成26年3月)、その論点整理が報告された<sup>2)</sup>。その中でも、21世紀型能力(国立教育政策研究所が、平成25年3月に、「教育課程の編成に関する基礎研究の報告書5」の中で指摘)を踏まえた取組や汎用的な力の評価方法の検討などが触れられている。

また世界的な動きとして、PISA 2012以来進められてきている問題解決力の調査に関わって、PISA2015では、この問題に関わってはコンピュータ上で行われることが決定され、DRAFT COLLABORATIVE PROBLEM SOLVING FRAMEWORK。(2013.3)の中で、問題例とその評価指標なども示されている<sup>3)</sup>。

このように「汎用的な力の育成と関わる学習活動の設計及び評価方法」については、学校種を越えて課題となっており、様々な角度からこのような情報を収集し、実践的な方法や課題を検討することが求められてきていると考えられる。この一連の動きの中で取り上げられている大きな関心事は、「生きる力」を基軸にこれまで進められてきた初等中等教育の方向性とキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどを基軸に

世界で現在検討され、実際に国レベルのカリキュラム改革や実践が行われてきている方向性との関係である(小柳2014)。

そこで本報告では、これら重要な審議・検討と関わって、21世紀に求められる力の育成とその評価に関わって7か国調査を行い(Sharon, Sargent, Byrne, and White.2010)、カリキュラム改革、評価方法の改革に着手しているアイルランドの取組(NCCA2011, 2012, 2013)に目を向け、そのデザインの枠組みの特徴を明らかにすることを目指している。

## 2. アイルランドのカリキュラム改革

### —Key Skills of Junior Cycle—

本報告がアイルランドに目を向けている理由は、以下のとおりである。アイルランドでは調査結果により、中等教育前期の1年目に学習活動に停滞が生じ、2年目に学習過程から逸脱していく(途中で学習をやめていく)傾向が出てくる。そして3年目には、中等教育後期の入試へ関心が向き、暗記学習や試験対策の学習に傾斜することを憂い、そのことへの対応として、学習内容やスキルに関する刷新(子ども達に学ぶ意味と見通しと手ごたえを感じさせる、21世紀に求められるなど力の育成ほか)、学校ベースによる修得評価の仕組みの導入、初等教育と中等教育後期の橋渡しの重要性への着目が改革として実行されつつある(年次計画により進行中)、ためである。

日本の中等教育前期でも同様な課題が見られる中、カリキュラムデザインとその評価の仕組みの改革は、ある意味で示唆的であるといえる。

アイルランドのNational Council for Curriculum and Assessment (NCCA)は、2011年11月に、Toward

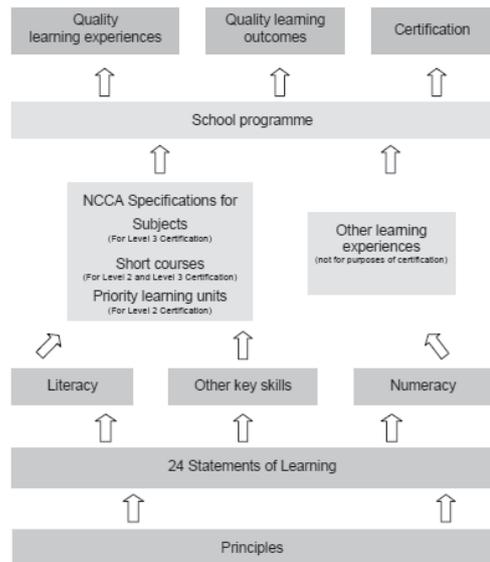


図1 中等教育前期の改革のフレームワーク

a Framework for Junior Cycle-Innovation and Identityを表した(図1~2、表1~4参照)。

これは、中等教育(前期)のヴィジョン、意味、原理を方向付けるものであり、まず8つの原理(①学びの質の高さ、②幸福感、③創造性と革新性、④選択と柔軟性、⑤学習活動への関与と参加、⑥統合教育、⑦継続性と発展、⑧学び方を学ばせる)に基づいている(表1参照)。

次に核となる学習として表現された24の学習の姿(表2参照)を実現すべく、基本となる2つのスキル(リテラシーとヌーメラシー)、他6つのキースキル(①課題達成と関わる自己管理スキル、②健康な状態を保つスキル、③コミュニケーションスキル、④創造性を発揮するためのスキル、⑤他者と一緒に活動するためのスキル、⑥情報の管理運営スキルとそれを用いた思考スキル:表3参照)をカリキュラムフレームワークの要素として定めている。

さらに、各6つのキースキルは、自己評価を推進するために、その下位指標として、「自分自身ができるようになる学びの姿」を明示している(表4参照)。

カリキュラムは、その力の育成を目指して、教科学習、ショートコース学習(フレームワークでは、ショートコースは、キースキルとより密接に関わって設計されるクロスカリキュラム的な現代的な課題のトピックや表現系の科目を取り扱う内容であり、2ない

表1 8つの原理

①学びの質の高さ; Quality すべての生徒が質の高い教育(学習者に対する高い期待と卓越性を求めることに特徴づけられる)を経験している。	②幸福感; Wellbeing 生徒の経験は、身体的・精神的・感情的・社会的な幸福観や復活力に直接寄与している。学ぶことは、学校・共同体・社会の集団的な幸福感に関心を向けた環境の中で行われている。
③創造性と革新性; Creativity and Innovation カリキュラム、アセスメント、教えること、学ぶことが、生徒が創造性や革新性と関わる機会を提供している。	④選択と柔軟性; Choice and Flexibility 中等教育前期のプログラムは、すべての生徒に幅広い学習経験を与えることに十分応えられ、生徒のニーズに沿って柔軟に選択できるものとなっている。
⑤学習活動への関与と参加; Engagement and Participation カリキュラム、アセスメント、教えること、学ぶことが、参加を促し、関与ややる気を引出し、学校外の生活とつながっている。	⑥統合教育; Inclusive education 教育経験の対象は、すべての生徒を包含している。その経験は、すべての生徒にとって機会の平等、参加の平等、具体的な成果の平等に寄与している。
⑦継続性と発展; Continuity and Development カリキュラム、アセスメント、教えること、学ぶことが、現在までの自分の学習を形作り、進捗を認識させ、将来の学習を支援している。	⑧学び方を学ばせる; Learning to learn 質の高いカリキュラム、アセスメント、教えること、学ぶことが、学校での学習、学校外の生活・その後の教育・職業生活との出会いにおいて、生徒により自律性を導く支援をしている。

し3年また中等教育前期をすべてを通じて、およそ1コース100時間で設計される。)、及び学内外の多様な学習経験の場、の設定によりプログラム構成されている。これらを通じて、学習経験の質保証、結果保証、そして資格の付与（修了を証明する認証）の3つを目指している。

実際の運用は、2014-2015にまず英語のカリキュラムの運用から始め、順にアイルランド語、科学、ビジネススタディーと、予定されている教科へ広げていくことが示されている。

### 3. アイルランドのカリキュラムの特徴

先にも述べたが、まずアイルランドではカリキュラム改革の中核として、中等教育前期へ焦点化している点である。ここから出発し、その前後の関連から初等学校や中等教育後期も改革しようとしている点が挙げられる。

次に、各教科とキースキルの関係を意識したカリキュラム内容が組み立てられている点が挙げられる。

3つ目は、中等教育前期のカリキュラムは、デザインとして、学校とそこに所属する生徒自身がカリキュラムを選べる選択幅が大きいことが挙げられる。

たとえば、(1) 8ないし7つの教科と、2つのショーコースを選択する場合、あるいは6つの教科と、4つのショーコースを選択する場合、(2) 9ないし8つの教科と、2つのショーコースを選択する場合、あるいは7つの教科と、4つのショーコースを選択する場合、(3) 10ないし9つの教科と、2つのショーコースを選択する場合、あるいは8つの教科と、4つのショーコースを選択する場合、など、科目数や内容が選べる事が挙げられる。

最後に4つ目は、カリキュラムとアセスメントの一体

表2 24の学習の姿

1. 第1言語を用いて、様々な手段を使いながら果敢にコミュニケーションをしている	13. 健康な生活スタイルを選択するために食物や料理の重要性を理解している
2. 生徒の能力に適切で、熟達のレベルに合わせて、第2言語、また第3言語を用いている	14. 情報に基づいて経済に関する意思決定を行い、賢い消費者スキルを開発している
3. 様々なテキストを作り出したり、味わったり、分析的に解釈したりしている	15. あらゆる学習領域における、数学的な知識・スキル・理解の可能性を認識している
4. 芸術的な活動で表現を行い、その過程や関連するスキルに関しても評価されている	16. パターンや関係を記述・図示・解釈・予想・説明している
5. 個人の価値観に気づき、道徳的な意思決定の過程を理解する機会を持っている	17. 数学的な知識、根拠、スキルを用いながら調査や問題解決のための戦略を工夫し、それを評価している
6. 様々な価値・信念・伝統が、生活している共同体や文化にどのように影響しているかを理解し、尊重している	18. 経験した出来事やその過程を観察・評価し、妥当な演繹結果や結論を描いている
7. 様々な文脈で権利や責任をもった能動的な市民になるとはどのようなことかを大切に考えている	19. 社会に対する科学やテクノロジーの役割やその貢献、個人・社会・世界にとつての重要性を理解している
8. 地域・国・世界の財産を尊重し、過去・現在の出来事、変化に向けた動きの重要性を理解している	20. あるデザインにチャレンジしていく会議の場で、適切にテクノロジーを用いている
9. 自分を取り巻く世界について、社会的・経済的・環境的な観点から、その起源や影響を理解している	21. 実践的なスキルを活用して、様々な材料やテクノロジーを用いてモデルや成果物を開発している
10. 持続可能な生活に向けて、意識・知識・スキル・価値観、やる気を持っている	22. イニシアチブを発揮し、革新的に取り組みながら、起業スキルを伸ばしている
11. 様々な予防に取り組み、自分の幸福や他人の幸福に努めている	23. コンセプトを実現へそのアイデアをつなげている
12. 体を動かすことに喜びを覚え、体力をつけ、運動に興味を持っている。	24. 責任と倫理に沿った方法で、テクノロジーやデジタルメディアを、協同・協働的に、創造的に、学習活動やコミュニケーション、ワークや考える時に用いている

表3 6つのキースキル

①課題達成と関わる自己管理スキル	②健康な状態を保つスキル	③コミュニケーションスキル
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分自身を知るスキル</li> <li>整理や統合の意思決定をするスキル</li> <li>個人の目標設定とその達成のためのスキル</li> <li>自分自身の学習を振り返るスキル</li> <li>自分自身や自分の学習を管理運営するためにデジタル・テクノロジーを用いるスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康を保ち、身体を活性化させるスキル</li> <li>社交スキル</li> <li>安全を守るスキル</li> <li>精神的な活発性のためのスキル</li> <li>自分で自信を持つスキル</li> <li>学習について能動的であるスキル</li> <li>デジタル・テクノロジーの利用に関する責任、安全、倫理を守るスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>傾聴と自己表現のスキル</li> <li>言語活用のスキル</li> <li>数字やデータ活用のスキル</li> <li>実演やプレゼンテーションのスキル</li> <li>論議やダイアログのスキル</li> <li>コミュニケーションのためにテクノロジーを用いるスキル</li> </ul>
④創造性を発揮するためのスキル	⑤他者と一緒に活動できるためのスキル	⑥情報の管理運営スキルとそれを用いた思考スキル
<ul style="list-style-type: none"> <li>イメージを持つスキル</li> <li>選択や代案を探索するスキル</li> <li>アイデアを出し、それを遂行するスキル</li> <li>創造的に学ぶスキル</li> <li>デジタル・テクノロジーを用いて創造性を刺激するスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>良い関係を築き、衝突にうまく対応するスキル</li> <li>協力に関するスキル</li> <li>違いを尊重するスキル</li> <li>世界をより良い場にするために貢献できるスキル</li> <li>他者と一緒に学ぶスキル</li> <li>デジタル・テクノロジーを用いて他に人と一緒に活動できるスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>好奇心を働かせるスキル</li> <li>情報やデータを集め、記録し、組織し、それらを評価できるスキル</li> <li>創造的、批判的（分析的）に思考できるスキル</li> <li>自分の学習を振り返って評価できるスキル</li> <li>コンテンツ（情報内容）にアクセスでき、管理運営でき、共有できるスキル</li> </ul>

改革を進めようとしている点である。

たとえば、学校ベースのアセスメントを重視し、中等教育前期の2年生の終わりに標準テストを実施する（総括評価）が、生徒のその間の学習活動を視覚化する道具等を用いて形成的な評価も併せて重視している。そして学習活動の報告を保護者によりわかりやすく示す工夫を取り入れている。そして学校ベースの認証（修了認証）への新しい形の導入を考えようとしている（図2）

4. まとめにかえて

本報告では、「汎用的な力の育成と関わる学習活動の設計及び評価方法」と関わって、カリキュラム改革、評価方法の改革に着手しているアイルランドの中等教育前期のカリキュラム改革の取組に目を向け、そのデザインの枠組みの特徴を明らかにしてきた。アイルランドでは、汎用的な力に相当する力をキースキルと表現し、カリキュラムデザインとしては、図3の囲みにあるような表現をしていることが明らかになった。

また汎用的な力に相当する6つのキースキルを、図4のような「個人的な能力」「社会的な能力」そして「現

表4 課題達成と関わる自己管理スキルの下位指標

要素	自分ができるようになる学びの姿
自分自身を知るスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の長所と短所を認識している</li> <li>自分が誰であるかを形作っているその影響を明らかにしている</li> <li>自分の意見や気持ちを適切に表現している</li> <li>自分がつまづいている所や困難な所に対処する方法を見つけている</li> </ul>
整理や統合の意思決定をするスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意思決定の経験を通じて、思考の重要性を理解している</li> <li>ある行為を計画し決定するとき、できるだけ多くの可能な帰結を考えている</li> <li>選択をするとき、異なる見方についての話が聞けている</li> <li>行為に関して様々な道を選べ、その選択根拠を説明している</li> <li>自分の意思決定が活きるように、計画をしている</li> </ul>
個人の目標設定とその達成のためのスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の目標を設定している</li> <li>自分の目標を達成するために必要なことを明らかにしている</li> <li>支援を求めたり、自分が支援が必要な時どこに行けばいいか知っている</li> <li>詳細な計画を準備している</li> <li>自分の過去の経験から学び、必要に応じて変えているき、共有できるスキル</li> </ul>
自分自身の学習を振り返るスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習ゴールを設定し、その目標達成に向けて自分の進捗状況を評価している</li> <li>自分の学習について、フィードバック情報を受け入れ、活用している</li> <li>自分の学習について評価情報を集め、改善する方法を自分で提案している</li> </ul>
自分自身や自分の学習を管理運営するためにデジタル・テクノロジーを用いるスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習の中で、計画し、管理運営し、そしてそれに従事していくために、様々なテクノロジーを用いている</li> <li>デジタル・テクノロジーの活用を通じて意見を表現し、共有し、提示している。</li> </ul>

今で求められるもの」「潜在力として求められるもの」として、仮にモデルを作成して、その位置けを考えると、キースキルは、汎用的な力だけでなく、その内容から21世紀スキルとも密接に関わる内容であり、より状況依存でその力が求められる時にはリテラシーやコンピテンシーと言われる力とも関わる、力の内容としても考えられた。

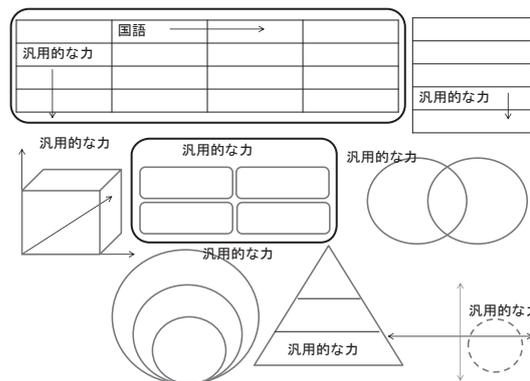


図3 様々なカリキュラムと汎用的な力の関係表現

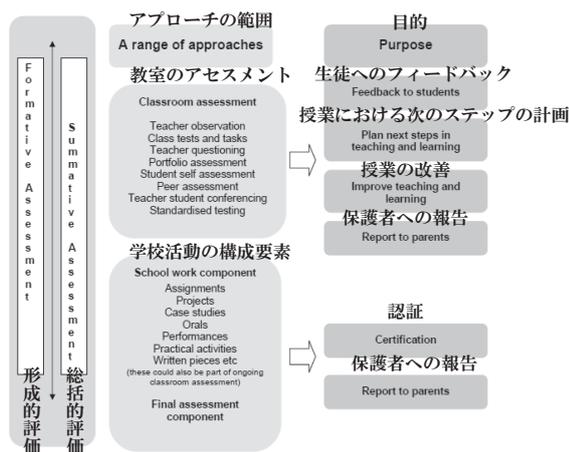


図2 学校ベースのアセスメントの仕組み



図4 知識・技能・能力における汎用的な力の位置

## 注

- 1) 河合塾は、試行を経て、2013年から実際に運用が開始されている、PROG (Progress Report on Generic Skills) は、2014年11月現在、40以上の国立大学、20以上の公立大学、140以上の私立大学が採用する動きも見られ、教学の質保証とIR (Institutional Research) を繋げて考える取組も進められてきている。コンセプトとして以下の図にあるような、高等教育において育てる能力の広がり、その力点移動なども進みつつあることを指摘し、リテラシー（①情報収集力、②情報分析力、③課題発見力、④構想力→知識を活用して課題を解決する力、習得した知識を活用することで育てられる力）とコンピテンシー（①対課題礎力（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）、②対人基礎力（親和力・基礎力・統率力）、③対自己基礎力（感情抑制力・自信創出力・行動持続力・実行力）→経験を積むことで身に付いた行動特性、経験を振り返り意識して行動することで育成される力）を測る道具とその活用方法を示している。
- 2) 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—について」として論点整理の概要及び全文が掲載されている。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm) (2014年11月確認)

- 3) 以下、URLにドラフトフレームワークが記載されている (2014年11月確認)

[http://www.oecd.org/callsfortenders/Annex%20ID\\_PISA%202015%20Collaborative%20Problem%20Solving%20Framework%20.pdf](http://www.oecd.org/callsfortenders/Annex%20ID_PISA%202015%20Collaborative%20Problem%20Solving%20Framework%20.pdf)

## 参考文献

- (1) Sharon O' Donnell, S.O., Sargent, C., Byrne, A., and White, E. (2010). Thematic Probe. Curriculum review in the INCA countries September. Dublin.
- (2) NCCA (2011). INCA probe: Curriculum specification in seven countries. Department of Education and Skills. Dublin.
- (3) NCCA (2012). A Framework for Junior Cycle. Department of Education and Skills. Dublin.
- (4) NCCA (2013). Key Skills of Junior Cycle. Department of Education and Skills. Dublin.
- (5) 小柳和喜雄 (2014) ヨーロッパ・キー・コンピテンシーの評価方法に関する調査報告. 奈良教育大学教育実践開発研究センター紀要 第23号, pp.139-144.